

2. 2024年度 修士論文要旨 (学生番号順)

多重知能理論に基づく「生きる力」の検討

—ドラマの統合機能を視点として—

学生番号22M21029 青木 凌河

文部科学省が「生きる力」を発表して約30年。現代はVUCA(予測困難で不確実、複雑で曖昧)の時代を迎える、「確かな学力」を始めとする教科ごとの授業は、現実の問題に取り組むには不十分ではないか、と疑問の声が上がっている。第4期教育振興基本計画でも単純な学力以上に、「問題解決能力」や「表現力」などの力が期待されていたことからも、教育内容や教育方法に変化をつけるべき時が来たのかもしれない。

本論文では、文部科学省が出した「生きる力」を検討し、次の世代が身につけるべき能力やそれを身につける方法を考察する。検討する視点として「多重知能理論」と「ドラマ」を用いる。その結果、「多重知能理論」で人間の知能を捉えなおした結果、人間の身につけるべき能力を「統合するマインド」としてまとめた。そしてそれを育成する活動として演劇を始めとする「ドラマ」を用いることでどのような効果が得られるのか考察する。これは教育科学で行われていたPBLにも通じる概念であり、物事を統合してプロジェクトに興することは、「問題解決能力」などを養う活動の例として挙げられる。

Keywords : キー・コンピテンシー、多重知能理論、生きる力、ドラマ、表現力

異校種間連携における校内研究の在り方に関する研究

—O大附属学校園の一貫教育カリキュラムの再検証を通して—

学生番号22M22012 北原 和明

校内研究は、対象とする幼児・児童・生徒に、何らかの変化をもたらすものであろう。その変化を成果として捉えるためには、これまでの授業研究を越えた子どもの姿の分析が不可欠である。本研究ではO大附属3校園で取り組まれた、一貫教育カリキュラム構築に関する研究について、発話記録の分析を中心に行なった。O大附属小学校の授業を、当時の研究理論に沿って再検証した結果には、ある程度の妥当性が見られたが、同時に不整合も認められた。しかし、同一の基準と手順でカリキュラムと授業の双方を分析し、比較検証することは、明確化した根拠を基に、カリキュラム・マネジメントを進めることにつながると考える。異校種の学校園が、同一の研究テーマを設定して、同一の基準と手順で検証を行い、カリキュラム・マネジメントを進めていくことは、本研究の目的である異校種間連携における校内研究の在り方に、一定の方向性を示すものであると考える。このために、計画的・継続的な授業記録の蓄積と、効率の良い分析手法を確立していくことは、これからの中長期的な教育に求められる要素であろう。本研究で得た知見は、戦後最大と言ってよい教育の変革期を乗り越え、未来の日本型教育構築の一助となるものであると考える。

Keywords : 異校種間連携、校内研究、一貫教育カリキュラム、プロトコル分析、語彙密度

幼児理解に繋がる保育者の感性を捉える試み

学生番号22M22014 西山 節子

本研究では、幼児理解に繋がる「保育者の感性」とはいかなるものであるかを明らかにするため、保育現場において「保育者の感性」がどのように捉えられているのかを分析するとともに、その向上を図るための主な要因を探ることを目的とした。

先ず、幼児教育・保育において、幼児理解及び保育者の感性がどのように捉えられているのか、多様な研究領域の先行研究及び文献から動向や課題等を整理した。次に、現職保育者を対象に質問紙調査を行い、保育現場において「保育者の感性」の重要度はどのように捉えられているのか量的に分析を行った。その結果、保育経験年数に関わらず、多くの保育者が「保育者の感性」は重要であると考えていることが明らかとなった。さらに、現職保育者の記述内容から「保育者の感性」の捉えに関する詳細な読み取りを行ったところ、幼児理解に繋がるものとしてイメージされていることが示唆された。これらを通して、保育者の幼児理解力と保育者の感性との関係を、より客観性をもって明らかにすることを試みた。今回、十分な因果関係を証明できるまでには至らなかったが、幼児理解に繋がる保育者の感性の向上を促すいくつかの要因を明示することができたと言える。

保育実践上の課題として、重要であると認知されながらも、「保育者の感性」に関する研究が進んでいないことが挙げられる。課題への対応として、「保育者の感性尺度」を作成し、得点の高い保育者の幼児理解の視点を明らかにすることで、幼児理解に繋がる保育者の感性の向上を図ること等を提案した。

Keywords : 幼児理解、保育者の感性、保育者の資質向上、保育経験、保育者養成

日常生活の「文字」と「視覚的心理面」に関する研究

学生番号22M22030 兜坂 和美

本研究の目的は、社会生活の中で円滑なコミュニケーションに貢献する可能性を有する、日常生活における「文字」の持つ美的な側面や感情的な側面、つまりは「視覚的心理面」に注目した研究の必要性を明らかにすることである。その背景として、現在の「文字」に関する研究は、伝達や理解のしやすさ、効率性といった「実用」的な側面を中心にするものか、あるいは、美や芸術性の追究とその表現に突出した「非実用」的な側面を中心とするものに大別される点がある。本研究では、文字には「実用」的側面と「非実用」的側面の両方が備わっており、いずれも「視覚的心理面」と密接に関連していることを明らかにした。さらに、日常生活においては、文字の効率性や視認性といった「実用」的な側面は注目されたり、配慮がなされたりする一方で、視覚的な美しさや心理面の間接的な表現とその伝達といった「非実用」的な側面は十分に議論されていないのが現状であり、「文字」研究の欠損部分となっていることを指摘した。

近年のSNS等における多様な表現形態やその使用状況から、特に個人間のコミュニケーションが単なる情報の正確な伝達にとどまらないことは明白である。「文字」を媒介としたコミュニケーションには多層的な効果が考えられる。教育の観点から見ると、文字の「非実用」的側面が持つ価値を認識することは、「社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う」可能性を有していると言える。文字の「実用」的な側面と「非実用」的な側面の双方をバランス良く兼ね備えた「文字」のあり方を探究するために、日常生活の文字の「非実用」的側面をふまえた研究が求められる。

Keywords : 実用と非実用、日本語の文字、表記の多様性、文字のデザイン、感情の伝達

親の過干渉的行動が中高生の自己決定に与える影響

学生番号22M22034 德留 宏紀

エデュケーションマルトリートメントは世界中で起きている問題であり、多様な行為によって子どもに甚大な被害を及ぼすことが指摘されている。しかし、教育科学の視点に基づいた量的研究は少ない。そこで、本研究は、親の過干渉的行動が自己決定に与える影響を調べた。本研究では、親の過干渉的行動を3タイプ（何にでもすぐに口出しをする、親子で意見が違うときは親の意見を優先する、できるだけいい大学に入れるように成績を上げてほしい）に分けて検証した。東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が実施した「子どもの生活と学びに関する親子調査」のデータを用いて、全国の小学1年生から高校3年生の子どもと保護者を当調査の対象とした。本研究では「2015年度ベースサーベイ（Wave1）」と「2016年度ベースサーベイ（Wave2）」の中学生1年生から高校2年生の生徒（2015年現在）と保護者を対象としたデータに対して、重回帰分析を実施した結果、「何にでもすぐに口出しをする」ということが子どもの自己決定と有意な負の関連を示した。また、「できるだけいい大学に入れるように成績を上げてほしい」ということは自己決定と有意な正の関連を示した。これらの結果から、何にでもすぐに口出しをするような、子どもに対する親の関わり方は、子どもの自己決定にネガティブな影響を与えるが、子どもの将来を見据えた親の過干渉的行動は必ずしも子どもの自己決定にネガティブな影響を与えているとは限らないことが示唆された。

Keywords : 過干渉、自己決定、エデュケーションマルトリートメント、毒親、教育虐待

声楽発声に基づいた話し声と歌声の実践的研究

—スポーツクラブ所属の大学生を対象として—

学生番号 22M22035 三好 啓子

本研究は、保育士・教員養成課程において、声に関する課題を抱えるスポーツクラブ所属の学生を対象に、声楽発声法を取り入れた実践的プログラムを全8回実施し、その効果と意義を検証したものである。発声メカニズムの理解と適切な発声法の習得により、学生の話し声と歌声に対する意識がどのように変化するのか分析した。

実践的プログラム実施後の音声調査では、音声分析ツールPraatを使用し、発声の変化を波動、スペクトグラム、ピッチ、インテンシティに基づいて比較した。さらに、アンケートとポートフォリオ作成を行い、SCAT分析を用いて声に対する意識の質的变化を評価した。その結果、歌唱と音読が相乗的に向上し、発声法の理解が技術向上に直結することが確認された。また、呼吸法を中心としたボディワークを取り入れた声楽発声プログラムによって、学生の話し声と歌声の音質、声の安定性、発声の柔軟性に顕著な改善が見られ、発声法の重要性が確認された。さらに、発声法の理解によって、体幹トレーニングや横隔膜運動に対する理解も深まり、クラブ活動にも影響を与えることが示唆された。今後はプログラムの効果をさらに検証するための課題が残されている。教育科学の観点から、発声教育は学習環境の質を高め、健全な声の使い方や呼吸法が、嗄声予防に繋がるとともに、音楽だけでなく、スポーツ、体育、国語の分野にも有益な科学的アプローチとなり得ると考えられた。

Keywords : 話し声、歌声、スポーツ、声楽発声、Praat、SCAT

島根県の観光に関する考察

—エビデンスに基づく予算配分の検討—

学生番号22M23001 小林 克己

本研究は、島根県における観光政策の予算配分の妥当性を科学的に検証し、地域の観光振興を効果的に実現するための施策を提案するものである。観光客の行動特性を定量的に捉えるため、負の二項分布モデル（NBDモデル）を適用し、訪問頻度や消費行動を分析した。その結果、現行の予算配分では観光地の認知向上に一定の成果が見られる一方、宿泊客やリピーターの増加、さらに観光消費額の向上には限界があることが判明した。特に、認知向上と同時に地域特化型イベントの開催が観光消費額や再訪意向率の向上に大きく寄与する可能性が示された。本研究の成果は島根県だけでなく、他の地方自治体への応用可能性も持ち、観光政策の新たな方向性を示唆するものである。エビデンスに基づいた戦略は、現代の複雑化する社会課題において、地域活性化させる重要なアプローチである。また、教育科学の視点からは、中央教育審議会では、2016年に『エビデンス』を活用した教育政策形成の重要性が述べられており、エビデンスは説明責任や合意形成のために必要不可欠なものとなってきている。本研究は、結果の確実性を見通すことが困難な観光の分野をエビデンスに基づいて効果的な予算配分を検討している。教育も同様の分野であり、効果的な教育実践を検討するにあたってエビデンスに基づく教育実践が得たい結果を確実に得ることができる可能性を拓くことを目指している。

Keywords : 負の二項分布モデル、観光政策、予算配分、エビデンス、訪問頻度

通級による指導における自閉症児の「自己理解」に関する指導と

般化促進のための実践方策

学生番号22M23002 中島 遥香

自閉症児の「自己理解」に関する指導においては、発達段階や障害特性を踏まえた指導が求められており、指導の般化を促すための働きかけが重要である。本研究では、小学校の通級による指導を担当する教員5名に対してインタビュー調査を行い、自閉症児の「自己理解」に関する指導の実態と般化促進の実践方策を明らかにすることを目的とした。

調査の結果、ソーシャル・スキル・トレーニングを中心とした内容が多く実践されており、児童が自分自身を客観的な視点で捉え、その上で必要な対応について考え、行動できるように指導していることが明らかになった。具体的には、自閉症の障害特性をふまえて、課題ばかりに向き合うのではなく、信頼関係を築き、成功体験の積み重ねや自己肯定感の向上が重視されていた。また、長所や短所を含む多様な自己に気付かせることから始まり、段階的に課題に向き合い始め、中学校進学を見据えて、自分に必要な対応を学び、適切な行動選択や意思決定につなげていくというように、発達段階に応じた指導の内容や工夫の変化がみられた。般化の実践方策については、連携と理解啓発を中心として実践されていた。今後、調査対象をさらに拡大し、多角的な視点から分析を深める必要がある。本研究で追求した「自己理解」に関する指導は、子どもたちの社会的自立の実現に向けた示唆を含むものであり、教育科学としても意義があると考えられる。

Keywords : 通級による指導、自閉症、自己理解、自立活動、般化

中国における小学生の放課後サービスの展開と課題

一日中考察をふまえて一

学生番号22M23004 杜 晓煦

放課後サービスとは、放課後、子どもに多様な活動を提供するサービスであり、学校と生活をつなぎ、教育と福祉の性質をもつ教育科学の領域と捉えられる。中国で放課後サービスが変動している。本研究は、日本の放課後児童クラブの実践を視角に加え、中国の小学校における放課後サービスの現状と問題点を浮かび上がらせ、中国の学校が担う放課後サービスを改善する可能性を探求するものである。そのため、諸国の放課後サービスの動向について検討し、中国の放課後サービスが学校教員中心—学校教育補完的性格が強いことを明らかにした。中国浙江省湖州市のH小学校の放課後サービスは、子どもの自由度が高くなく、教師の人手不足、学校の制度が不備、社会教育の不足など課題が残っている。岡山市のうのクラブは、子どもの遊びの自主性、生活の実践力を重視すること、クラブが縦割り集団で、子どもの人間関係を築くこと、社会の多様な人材を導入すること、平等的な子どもと指導員の関係などの特徴があるが、子ども集団がやや大きめであり、集団と個別に対する対応の複雑さ、補助員の量と質の課題など課題もみえてくる。

うのクラブの実践から、中国の放課後サービスへの示唆として、家庭教育や地域教育の性格、子どもの主体性、異年齢集団の取り組み、教師の負担やストレスを解消する方法などを検討している。研究の成果は、①インタビュー調査により、中国の放課後サービスにより実態に迫ったこと、②日本の放課後サービスに関する中国研究に、アクション・リサーチを導入したこと、③国際的な視点を加え、中国の放課後サービスの特徴を明らかにしたことである。今後はうのクラブのような公設民営だけでなく、民設民営の放課後サービスも検証したい。

Keywords : 放課後サービス、放課後児童クラブ、小学生、日中考察、アクション・リサーチ

両親の養育態度が高校生の職業選択に与える影響

—統計的因果推論を用いた縦断的研究—

学生番号22M23005 長谷川 颯大

近年、若者の早期離職率が増加傾向を示している。若者たちが早期離職を選択する主な理由はミスマッチであり、ミスマッチを防ぐ対策が求められるようになった。ミスマッチは自分に合った職業を主体的に考える時間の不足に起因していると考えられる。しかし、学校の中で可能な支援は限られており、学校だけで支援することは難しいと考えられた。そこで、本研究は学校外の支援方法として、高校生が自分の考えを持つように促す両親の養育態度に着目した。研究1では、両親の自立を促す養育態度が高校生のなりたい職業の有無に与える影響を調べるために、傾向スコアを用いて分析を実施した。研究2では、結果の頑健性を確認するために、ロジスティック回帰分析を用いて感度分析を実施した。本研究は、東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で実施した「子どもの生活と学びに関する親子調査」のデータを用いた。親子調査は全国の小学1年生から高校3年生の子どもと保護者を対象としたパネル調査であり、研究1では1061組、研究2では1059組を分析対象とした。本研究の結果から、自分の考えを持つことを促す養育態度は高校生のなりたい職業の有無と正の関連があることが示された。したがって、自立を促す養育態度が高校生のなりたい将来の有無に影響することが示唆された。

Keywords : 養育態度、高校生、職業選択、傾向スコア、統計的因果推論

絵画鑑賞時の視点及び身体の動きと 言語による表現内容との関係についての研究

学生番号22M23006 笠原 萌

美術教育の鑑賞活動では、鑑賞者が感受したことを記述や発話により表現しているとされる。視点や身体行為と言語との関連性があるならば、生徒の鑑賞時の姿を見とるための手段として期待される。そこで、本研究の目的を、(1)絵画鑑賞によって、中学生、高校生と大学生に表れる身体行為と感受への効果を明らかにすること、(2)指導者が鑑賞者の行為を見とるための視点を明らかにすることとした。

本調査では、中学生から大学生までの53名が、130号の初見の絵画作品を鑑賞する姿を三か所から動画撮影し、鑑賞時間内での鑑賞者の目の位置の軌跡を記録する。さらに、撮影した動画を鑑賞者自身が観聴し、鑑賞中に作品の中で見ていた場所を指定して感じたことや思考したことを記述してもらった。これらを、量的、質的に分析した。本調査により、①美術の表現経験の多い鑑賞者は鑑賞作品との距離が制作時と近くなる傾向にあること、②表現や鑑賞の経験が少ない鑑賞者は主観で作品を捉えようとする傾向にあることが分かった。この二つの成果により、身体の経験と思考パターンに相関性があることや、鑑賞作品に関連した制作経験が鑑賞者の目的意識を高めるようになる可能性、鑑賞後の感想に現れる他者との違いについて、他者の立場、経験、鑑賞目的に意識を向かわせる問い合わせの検討が、相互理解や社会への関心を深める指導につながる可能性が示唆された。以上のことから、本研究では、鑑賞の授業において、教員の環境設定や声掛け、生徒の鑑賞意図を記述や発話以外からも見とる際の一助となる可能性を秘めた成果が得られたと言えよう。

Keywords : 美術教育、鑑賞、視点、身体行為、経験

English Extensive Reading Training to Improve English Learners' Word Memorization and Learning Abilities

—Cases of Chinese Primary School and High School Students—

Student Number 22M23007 CHEN KEXIN

This study explores the effectiveness of extensive reading in enhancing vocabulary acquisition, reading comprehension, and motivation among Chinese primary and high school students learning English. By utilizing pre- and post-tests, the study evaluates the impact of extensive reading training that students can select books that suit their own level and preferences from the options provided. Results reveal significant improvements in Cloze test scores, particularly for students who reported better understanding of story content during reading. Primary school students benefited from simplified storybooks, showing increased confidence and seemed to show better memorization of vocabulary. High school students, engaging with more complex texts, demonstrated better comprehension and application of learned vocabulary. These findings suggest that extensive reading promotes natural language processing by exposing students to the vocabulary in context and encouraging enjoyable learning experiences. The integration of extensive reading into educational curricula has the potential to address challenges in exam-focused learning environments, making English education more engaging and effective for diverse age groups and learning levels.

Keywords : extensive reading, vocabulary acquisition, motivation, reading comprehension, language learning strategies

新興国におけるリコーダーの普及活動

—ヤマハの教育楽器とスクールプロジェクトに着目して—

学生番号22M23008 土佐 千紘

本研究は、カンボジアにおける音楽科教育の現状と課題を分析し、ヤマハ株式会社が実施するスクールプロジェクトの導入を検討したものである。リコーダーを教育楽器としてカンボジアへ効果的に取り入れる方法を考察することで、リコーダーを用いた新興国への音楽普及の可能性を明らかにすることが本研究の目的である。第1章では、リコーダーの歴史を遡り、現代の形に至るまでの変遷を辿った。第2章では、日本に導入されたリコーダーが、教育楽器としての役割を担うようになった経緯を明らかにし、日本におけるリコーダー教育の意義を論じた。第3章では、スクールプロジェクトの活動内容に焦点を当て、その具体的な取り組みや特徴、そして音楽科教育における意義を考察した。第4章では、インタビュー調査と教科書分析を行い、カンボジアの教育現場の現状と音楽科教育が直面している課題を指摘した。第5章では、本論全体を総括し、カンボジアへのスクールプロジェクトの導入を仮説的に検討した。そして、新興国への音楽普及活動における地域文化を尊重した教材づくりの重要性とそれがもたらす教育的展望について論じた。本研究は、新興国の教育支援における持続可能性を模索すると共に、地域文化との融合を重視した教育プログラムの構築が、リコーダーの普及において重要な役割を果たすことを示している。本研究を通じて得られた知見は、音楽科教育を通じた国際協力の在り方に新たな示唆を与えるものである。教育科学の観点では、音楽を媒介に異文化や価値観を超える交流の実現が、現代社会における多文化共生の課題解決にもつながる。

Keywords : 音楽教育、音楽普及、器楽教育、異文化、SDGs

Teaching Patriotism in Schools

—Perspectives of Japanese and Ghanaian Teachers—

Student Number 22M23010 Okota-Wilson Nicholas

This qualitative study explored Japanese and Ghanaian teachers' understanding of patriotism, their views on teaching it in schools, and its relationship with global citizenship. This study employed the purposive sampling technique. Online interviews were used to collect data. Braun and Clarke's reflexive thematic analysis was used to analyze the data for the findings. The findings showed that Japanese teachers' understanding of patriotism was cultural heritage, concerned, and role-based kinds of patriotism. Developing students' independent thinking skills, addressing misconceptions, and knowing how to act as a Japanese were reasons some teachers would teach patriotism. Some teachers used impartial pedagogy to handle patriotic-related topics whilst others avoided it. Ghanaian teachers understood patriotism as both nationalistic and constructive. And the reason for teaching patriotism is to prepare students for citizenship. To Ghanaian teachers, patriotism should be promoted in schools by rational means. This study provides evidence for the role of schools in patriotic education by having open discussions about the good and bad of patriotism to equip students with emotional and reasoning skills to make decisions and judgments about it and the need to connect patriotism to global citizenship.

Keywords : patriotism, reasons to teach patriotism in schools, approaches to handling, patriotism in schools, global citizenship

教科外活動における伝統文化教育の内容と方法に関する研究

—日本と中国の取組の比較を通して—

学生番号22M23011 DU JIAYI

本研究は、日本と中国における伝統文化教育を、教科外活動の取り組みを取り上げて分析し、その内容と方法を明らかにしようとするものである。本研究では、日中の伝統文化教育の歴史的変遷と目標・内容体系を考察し、教育政策や実践事例を基に、伝統文化教育が市民性育成にどのように寄与しているかを明らかにした。さらに、教科外活動における伝統文化教育の意義を明らかにした。その際、日本の「総合的な学習の時間」と中国の「総合実践活動」を取り上げ、実践で展開される活動内容を「事実」「価値」「行動」の三段階で分析を行った。これを踏まえて、日本と中国の教科外活動における伝統文化教育の特質を、「伝統文化の理解を目指した教育の特質」「伝統文化に対する愛情を育てる教育の特質」「伝統文化の維持・発展を支える市民を育てる教育の特質」の三つの側面から明らかにした。多文化共生が求められる現代社会において、伝統文化教育の意義と可能性を示唆する点で教育科学研究としての意義を持つ研究である。

Keywords : 伝統文化教育、教科外活動、総合的な学習の時間、総合実践活動、日中比較

連立1次方程式に関する教科書比較とプログラミングによる教材

学生番号22M23012 井上 絵美

本論文では、筆者の学部卒業論文で作成した、JavaScriptを用いた練習プログラムのうち、中学校2年生と高等学校数学Ⅰで取り扱う連立1次方程式の練習プログラムを改良することを目指す。プログラムは、ホームページを更新するたびに、問題の数値と答えが変わるプログラムとなっている。このプログラムに出題される問題に細かな条件を与えることで、生徒らが様々なタイプの問題に確実に出会えるようにした。そのことによって、どんな問題が出題されても問題を解くことができる力が育成されると期待できる。

第1章では、4冊の線形代数学の本のrankの一意性の証明と定義の違い、次元の一意性の証明の違いを比較した。第2章では、第1章をもとにJavaScriptを用いた練習プログラムに数学的な裏付けを与える。第3章では、練習プログラムを改良するために、生徒が感じるであろう問題ごとの違いを考えていく。また、教育現場で個別最適な学びを実現するために改良を施したプログラムの仕様を述べる。

本研究で制作したプログラムは、生徒の理解度ごとに適切な問題を出題するプログラムを作るという応用も可能である。そのようなプログラムを作ることで、より個別最適な学びを行うことができるようになる。また、問題の難易度を細かく分析することは、生徒の躊躇の場所に気づき、適切なアドバイスを与えることにもつながる。

Keywords : 数学教育、線形代数学、連立1次方程式、プログラミング、JavaScript

親の高頻度な助言が高校生の学習意欲に与える影響

学生番号22M23013 大鷹 幹樹

高頻度な助言はヘリコプター・ペアレンティングの一つであり、親の不適切な関わり方であるヘリコプター・ペアレンティングを調べた研究は国内外で現在も多く実施されている。自律の成長を考慮しないヘリコプター・ペアレンティングは長期にわたって子どもの成長を阻害する可能性が示唆されているため、高頻度な助言は学習意欲や進路選択においても悪影響を与える可能性がある。実際、ヘリコプター・ペアレンティングは大学生の学習意欲と負の相関関係が示されており、高校生の学習意欲だけでなく学習成績に対しても影響を与える可能性がある。しかし、先行研究は縦断データを用いておらず、他の要因が適切に統制されていないため、因果関係は現在も不明である。したがって、本研究は、親の高頻度な助言が高校生の学習意欲に与える影響を検討することを目的として、因果推論の考え方に基づいた重回帰分析とマルチレベル分析を実施した。分析は、東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が実施したパネル調査を用いた。2つの分析の結果、親の高頻度な助言は、高校生の学習意欲を低下させることを示した。本研究の結果から、家庭の社会経済的背景に関わらず、親の無自覚な助言が高校生の学習意欲を低下させることが示唆された。

Keywords : ヘリコプター・ペアレンティング、学習意欲、因果推論、マルチレベル分析、縦断データ

歴史的エンパシーの活用による歴史授業改善に関する研究

—歴史総合小単元「ホロコーストと『普通の人びと』」を事例として—

学生番号22M23014 清川 美空

本研究の目的は、歴史的エンパシーを活用しながら、市民的資質の育成をめざした歴史授業構成論を明らかにして、高等学校歴史総合の小単元「ホロコーストと『普通の人びと』」を開発することである。

まず、子どもによる歴史解釈を重視した構成主義に基づく歴史教育の原理として、歴史的エンパシーを育成する歴史教育に着目し、その特質と課題を検討した。次に、市民的資質の育成を目指した社会科教育の原理として、意思決定学習に着目し、その特質と課題を検討した。最後に、歴史的エンパシーと意思決定学習の先行研究課題を踏まえて、新たに授業構成原理と小単元を開発し、提案した。

本研究の成果は次の2つである。第一に、社会科授業では従来はあまり活用されることがなかった物語に注目し、事実と感情の両側面から歴史解釈を試みる授業構成を提案した点である。第二に、歴史的エンパシーを活用することで、物語の人物への感情の理解を促し、登場人物への追体験を通して、自らの意思決定や価値観を揺さぶり、歴史の再解釈と自己の意思決定の再構成を図る授業を提案できた点である。本研究は、歴史授業改善に関する有効な示唆を提供し、教育科学研究への発展に貢献できると考える。

Keywords : 歴史的エンパシー、歴史総合、授業開発、ホロコースト、物語

小学校体育副読本のイラストに対する指導者の認識

学生番号22M23015 部矢 有紀

本研究では、指導者は小学校体育の副読本におけるイラストが児童の運動学習にどのような影響を与えると認識しているのかについて検討した。指導者とは、小学校教師とスポーツ経験・指導経験を持つ専門家のことを指し、それぞれがどのような考え方を持っているのか、M-GTAを用いた質的アプローチによって対象者の語りを分析した。その結果から、教師はイラストに対して肯定的認識と否定的認識の双方を有しております、児童にどのような教育的效果を望むかによって活用の場を選択していることが明らかになった。また、専門家は動感への違和感やイラストとゲームとの乖離などから、体育においては問題ないという見解を示しつつも批判的な認識を抱いていることが読み取れた。このことから、副読本を手に取る児童へ潜在的に動感への違和感を抱かせることや、違和感に気付かず正しい感覚だと認識させてしまう可能性があることが考えられ、イラストの在り方について検討する必要性が示唆された。

また、本研究は今後の体育副読本が担うべき役割やそれに掲載されるイラストの目的について、現場の声を基に検討した研究という側面も含まれるという意味で、有益な教育科学研究となっていると考える。

Keywords : 小学校教育、体育科教育、副読本、イラスト、違和感

理事会構成の多様性が大学経営に与える影響

学生番号22M23016 HE JIAYI

本研究の目的は大学における理事会構成員の多様化が大学の教育・研究パフォーマンスを改善するかどうかを実証的に明らかにすることである。教育研究の多様化が進む中で、企業のそれと同様に大学のガバナンス構造においても多様な人材を登用することの必要性がますます認識されるようになっていく。それを反映して、近年、日本の国立大学においても外部理事や女性理事の積極的な登用がみられる。しかし、こうしたガバナンス改革の影響について、これまで多くの研究は教育制度・政策との関連についての理論的な考察にとどまり、実証的な効果検証が不足しているのが現状である。そこで、本研究は大学理事の属性に関する個人レベルのデータと大学の教育・研究パフォーマンスに関する大学レベルのデータからなる独自のデータベースを構築し、双向固定効果モデルを用いた実証分析を行う。本研究の主要な分析結果は以下の通りである。外部理事や女性理事の登用の拡大が大学の教育・研究パフォーマンスを改善するという積極的証左は得られない。さらに、役員会構成の多様化がもたらす限界効果が非線形である可能性を考慮した場合でも、推計結果はベースライン推計のそれと整合的である。こうした分析結果からは、日本の国立大学における役員会構成員の多様化は、現状では形式的なものにとどまり、実効性をともなっていない可能性が示唆される。

Keywords : 大学ガバナンス、理事会、ダイバーシティ経営、大学パフォーマンス、固定効果モデル

マウス精巣上体における糖輸送体の部位特異的発現

学生番号22M23017 棚井 光一郎

精巣上体は精巣で產生された精子の成熟と貯蔵を担う男性副生殖器であり、著しく折れ疊まれた1本の精巣上体管から構成される。解剖学的に4つの部位（起始部・頭部・体部・尾部）に分けられ、起始部は精巣分泌物の吸收、頭部・体部は精子成熟に関与する物質の分泌、尾部は精子の貯蔵と余剰分泌物の処理を担うとされる。精巣上体ではこれまでに複数種の糖輸送体の遺伝子発現が報告されており、細胞レベルの解析が進んでいる。本研究では、精巣上体において既に報告のある多様な糖輸送体遺伝子の発現とそれらの解剖学的な発現部位の特異性との関連を調べた。糖輸送体分子の遺伝子レベルおよびタンパク質レベルの解析より、それらの発現量と発現部位に差があることがわかった。精巣上体管管腔は血管内腔に比してグルコース濃度が著しく低いとされる。発現している糖輸送体は、血管内腔から精巣上体管上皮細胞および管腔への糖の拡散に寄与していることが予想された。一方で、精巣上体管管腔のグルコース濃度は各部位で異なることが報告されており、糖輸送体が管腔内のグルコース濃度勾配の形成や間接的には各部位の機能差にも関与している可能性が示唆された。糖輸送体ごとの発現部位の違いは、精巣上体管の解剖学的位置とそれらの機能発現が連関していることを示している。今後は、精巣上体で複数種の糖輸送体が部位特異的に機能している理由を解明するため、糖輸送体遺伝子の機能阻害を指標とした解析を進めていく予定である。本研究の成果は、理科・生命領域における「生命の構造と機能」および「生命の連続性」の理解を深める教材の一例になり得る。尚、本研究成果の一部について、日本動物学会第93回東京大会（2022）および第94回山形大会（2023）で筆頭著者として口演発表を行った。

Keywords : epididymal duct, glucose transporter, epithelial cells, facilitated diffusion, immunohistochemistry

音楽を通して学ぶ小学校社会科単元開発研究

—労作歌の教材化を通して—

学生番号 22M23018 角南 葵乃助

本研究では、音楽を教材とした共感的理解を通じた価値観形成を目的とする単元の構成原理を明らかにし、その構成原理に基づいた単元開発を行い、その効果を検討した。

社会科における文化教育は、田中伸によると、表面的な理念や制度・領域の理解を目指す元来の社会認識教育から制度や領域の深層にある意味の枠組みを了解した上で、新たな社会の枠組みの構築を目的とする文化認識教育への転換がみられた。その転換において、市民的資質の育成を目的とした市民性教育としての側面が主張されるようになる。本研究では、上記のような先行研究をふまえて、第6学年単元「労作歌のいま」を開発した。本単元は、労作歌を教材として、共感的な理解を通して、勤労を始めとする困難への向き合い方とその背後にある価値観の吟味を行う。ここでは、勤労者によって歌われ、受け入れられてきた労作歌を教材として、キャリア教育の目的の一つである児童の職業観・勤労観の育成に寄与できる。本単元の開発により、小学校社会科における価値観形成を目的とした文化学習単元の構成原理を提案することができた。教育科学においても、文化を用いた学習の市民的資質の育成という教育的意義の要因を明らかにするものであった。

Keywords : 小学校社会科、共感的理解、価値観形成教育、文化教育、音楽

中国における ADHD 生徒とその家族の支援ニーズに関する 事例研究

学生番号22M23019 王 慧瑩

本研究では、中小都市の高等学校に在籍するADHD生徒とその家族の事例を通して、後方視的にアプローチを行い、直面した課題と支援ニーズを明らかにすることを目的とした。それに基づいて今後の家族全体への包括的な支援体制の改善策を提案することを目指した。中国中小都市に所在する高等学校3年生であるADHD生徒と、その生徒の父親、母親、同居する従兄弟（計4名）にインタビュー調査を行った。KJ法に基づく質的分析の結果、彼らが直面した課題は、【知識・情報提供の充実】【地域における支援体制の構築】【家庭内支援の強化】【学校・家庭との連携の支援】に分類できた。これらの課題を改善するためには、家族や教育現場に向けた、ADHDに関する正確な情報提供と知識を普及させるための研修が必要である。また、中小都市の特性に応じた専門支援機関の設置や、遠隔でも利用可能なサポートの導入をすることも重要である。さらに、多分野からの支援プログラムの導入も求められている。この改善はADHD児童生徒とその家族に包括的な支援する仕組みづくりが不可欠である。

Keywords : 中華人民共和国, ADHD, 支援ニーズ, 事例研究, 中小都市

A Study of Different Types of Lexical Chunk: From the Analysis of High School Textbooks and the Dictation Abilities of Learners at Different Levels

Student Number 22M23020 ZHANG YAOFANG

This study investigates the application of different types of lexical chunks in high school English textbooks and examines the different chunk dictation abilities of learners at different levels. The research first analyzed high school English textbooks of Japan and China to identify which type of lexical chunks are emphasized in the textbooks. After that, an experiment involving a dictation test and questionnaire was conducted among high school students to explore their lexical chunk dictation abilities and their lexis learning strategies. The results indicate that while collocations are prominently featured in the textbooks, other types of lexical chunks, particularly idioms, are often overlooked. Furthermore, findings from the experiment reveal significant differences in dictation abilities among students of different levels. Correlation analysis further demonstrates a link between students' dictation abilities and their awareness and use of lexical chunks. This study tries to explore which kind of lexical chunk is emphasized in the textbooks and which is better recognized by students. The results will give some implication on the lexis-related teaching method in language teaching, which will accordingly contribute to the science of education.

Keywords : lexical chunks, Lexical Approach, English textbooks, chunk listening,
correlation analysis

Oral Interaction Activities in the Japanese EFL Context: An Analysis of Junior High School Textbooks and Learners' Perceptions

Student Number 22M23022 Haruna Shiga

Suggestions have been made from the perspectives of "self" to better understand L2 learning motivation, with scholars discussing the potential effectiveness of learners' clear and plausible future visions. However, in EFL contexts such as Japan, scaffolding learners to find personal connection to the language remains a great challenge.

Acknowledging such circumstances, this study explores oral interaction activities at the junior high school level as a potential resource for exposing learners to various English-speaking situations that may help them develop their own visions as English users. A textbook analysis and a questionnaire survey based on five different conversation situations were conducted. The results suggest that 1) incorporating diverse English-speaking situations (e.g. traveling overseas, asking a stranger for help) may provide a greater sense of practicality for learners; and 2) effective use of conversation models may be attained by understanding the traits of different situation models, such as attainable school life settings, overseas scenarios with practicality, or challenging contexts like studying abroad. The findings contribute to the field of Educational Science by suggesting a potential approach to encourage learners to establish their own relationship with what they learn, through further investigation into the effectiveness and practical use in actual EFL classrooms.

Keywords : oral interaction, EFL, speaking (interaction), motivation, conversation models

日中小学校における道徳教育の比較

—三つの道徳科授業の分析を通して—

学生番号22M23023 WANG YIMENG

本研究は、中国と日本の小学校における道徳科授業の指導法に焦点を当て、両国の共通点と相違点を明らかにするとともに、中国における授業実践に向けた教師側への示唆を得ることを目的とするものである。

まず両国の道徳教育における教育目標や授業時間の配分を明確化したうえで、日本の小学校2クラス（3年生と5年生）および中国の小学校1クラス（5年生）の道徳の授業をビデオに録画し、授業後の教師へのインタビューを行うことで質的・量的分析を行った。

分析の結果、以下の点が明らかになった。第一に、日中両国の道徳教育は、共通して児童の品格形成や責任感、生命尊重を重視している一方で、日本は個人の自律と精神的成长に重点を置き、中国は集団意識や社会貢献を重視する傾向がある。第二に、授業時間の配分において、日本は均一的な設定を行うのに対し、中国は学年に応じて授業時間を段階的に増加させる仕組みを採用している。両国の教師は「多様な対話の重要性」を認識しているものの、中国では教師と児童の対話が優先される傾向があることが確認された。特に、日本の授業における児童の挙手発言と直接発言を組み合わせた対話形式は、中国の教師が期待する授業改善の参考になると考えられる。

Keywords : 道徳教育, 指導法, 道徳科授業, 日中比較, ビデオ録画, インタビュー調査

エンドサイトーシスの機能制御を可能とする 新規 AAK1 阻害剤の開発

学生番号22M23024 松本 郁哉

クラスリン依存性エンドサイトーシスはウイルス感染等の代表的な経路であり、AAK1 (AP2 associated protein kinase 1) は、そのシグナル伝達系に関与するキナーゼとして知られている。AP2 (Adaptor protein complex-2) の μ 2 サブユニットが AAK1 により特異的にリン酸化されると、AP2 は細胞表面のクラスリン結合部位にクラスリンを集結させる。細胞外からの侵入物は、集結クラスリンと複数のタンパク質で被覆され、細胞膜は球形に変形し、さらにダイナミンにより細胞膜から切断され、生成した被覆小胞は細胞質に浮遊・輸送され、細胞情報機能等に関与する。当研究室が構築した化合物ライブラリーについて、共同研究機関が AAK1 阻害活性のスクリーニングを行ったところ、選択的阻害剤として TIM-098 が得られた。TIM-098 は、その合成プロセスで 4 異性体が生成される。本研究では異性体を単離できる合成経路を開発し、活性体の単離・構造決定に成功した。得られた TIM-098a は AAK1 に対して高い阻害活性を示し、そのエンドサイトーシス調節阻害機能が明らかとなった。

本研究は社会問題である感染症の課題解決に向けた、抗ウイルス剤開発の基礎研究として重要であり、キナーゼ阻害剤開発の実証例となる。また有機化学、生化学、細胞生物学、コンピュータシミュレーションなど、様々な分野の専門性が集約された国際共同研究であり、綿密な異分野連携で達成された成果として教育科学的な意義も大きい。(発表論文 : Development of a novel AAK1 inhibitor via Kinobeads-based screening, *Scientific Reports*, 2024, 14, 6723)

Keywords : シグナル伝達系、クラスリン依存性エンドサイトーシス、キナーゼ阻害剤、AP2、生化学

A STUDY ON THE SIGNIFICANCE OF TEACHER TRAINING PROGRAMS IN GLOBAL CITIZENSHIP EDUCATION: INSIGHTS FROM TEACHERS PARTICIPATING IN PROGRAMS PROVIDED BY INTERNATIONAL ORGANIZATIONS

Student Number 22M23025 LUO GUYUE

This study investigates the significance of teacher training programs in Global Citizenship Education (GCED), focusing on insights from teachers participating in programs provided by international organizations. Through semi-structured interviews with four teachers from Japan and Korea, the research explores the impact of these training programs on participants' knowledge, teaching practices, and mindset shifts. Key findings reveal that the programs enhance educators' understanding of global interconnectedness, cultural diversity, and sustainable development while fostering practical skills for integrating GCED principles into classroom practices. By synthesizing participant narratives, this study highlights the transformative potential of GCED training programs in bridging local and global educational goals, emphasizing their role in developing inclusive, action-oriented pedagogy. The findings contribute to the broader discourse on teacher capacity building, offering recommendations for improving program design and addressing gaps in implementation. Furthermore, this research underscores the importance of GCED training as a vital component in advancing educational science, fostering a more sustainable and interconnected global society.

Keywords : global citizenship education, interview survey, teacher training, international organizations, international understanding

大学統合・再編のスピルオーバー効果の評価

—地方国立大学統合の定量的ケーススタディー—

学生番号22M23027 ZHANG MINGSHI

本研究の目的は大学の統合・再編が地域雇用に与える影響についてスピルオーバー効果の観点から解明することである。日本では地方から大都市圏への若年層の流出が年々加速傾向にあり、それによる地域経済の縮小がさらなる地方の人口減少をもたらすという現象が見られる。こうした地方における人口減少の負のスパイラルを克服するために、日本政府は人材育成の高度化やイノベーション創出といった大学統合・再編のスピルオーバー効果を活用することで地方創生を実現することを目指している。そこで、本研究は2000年代初頭における8組16大学を対象に、合成コントロール法(synthetic control method)によって地方国立大学の統合・再編が地域雇用に与えた影響について実証分析を行った。本研究の主要な分析結果は以下の通りである。本研究の分析対象である地方国立大学の統合・再編は、地域雇用に正の影響をもたらした事例、影響が見られなかった事例、及び適切な合成コントロールを作成することができない事例の3タイプに分類されるというものである。また、 placebo test (placebo test) を実施し、合成コントロール法による分析結果の頑健性を確認した。本研究の教育科学への貢献は、大学統合・再編という高等教育政策のあり方が地域社会に及ぼす社会経済効果を実証的に解明した点にある。

Keywords : 大学統合, 合成コントロール法, スピルオーバー効果, 地域雇用, プラシーボテスト

A Research Study on the Sense of Community in Japanese Junior High Schools

—A Consideration from the Perspective of Teachers' Classroom Management—

Student Number 22M23028 HUAMAN PALOMINO KATIA SARA

There is a basic belief that group work is very important in Japanese education and that teachers make a great effort to build that sense of community in their classrooms. Of course, it makes great contributions to students' performance in school and society, such as social order compared to other countries, whereas on the other side, drawbacks can be hidden when trying to achieve it. The purpose of the current research is to understand Japanese teachers' perceptions about managing a classroom towards a Sense of Community building by the year 2024, their concerns about it, and whether it strengthens or affects students negatively. The paradigm of this study was the qualitative ethnographic method, and the techniques were (a) direct observation using field notes as a tool and (b) a qualitative survey whose instrument was an online questionnaire. The latter was applied to 3 Japanese teachers at Kyoyama Junior High School, randomly selected. The result of this study reaffirms that SoC building in Japanese classrooms is as important as building academic skills due to personal and social well-being, for students' adulthood life as well as for communication abilities development, whereas creating a strong sense of community must not be overthought. Still, there are conflicts while constructing it such as the dichotomy between being aware of others or being aware of oneself, concern about students with passive personality, limited positive responses to SoC, and the supremacy of majority rules. Finally, this investigation also discloses some classroom dynamics strategies that enhance SoC building.

Keywords : history of Japanese classroom management, classroom management, sense of community, community of practice, tokubetsu katsudo

教育系養護教諭養成課程における頭部外傷の フィジカルアセスメント教育の実践と評価

学生番号22M23029 坂本 悠

本研究では、教育系養護教諭養成課程における頭部外傷のフィジカルアセスメント教育について、教育科学の観点から、事例と ChatGPT を授業で活用することの教育効果を明らかにする。

第Ⅰ章では、事例を活用した実践について報告する。養護教諭養成課程の学生 53 名（有効回答率 88%）を調査対象に、特に判断力が重要な頭部外傷の模擬事例を活用した授業を実施した。授業前後に、フィジカルアセスメントに関する資質能力や授業評価についてアンケート調査と小テストを実施し、授業の効果を検証した。頭部外傷のフィジカルアセスメントに関する理解度や実践に対する自信においては、授業前より授業後の方が有意に高い評価だった。本研究における事例を活用した授業は、フィジカルアセスメントに関する資質能力を向上させることができた。

第Ⅱ章では、ChatGPT を活用した実践について報告する。養護教諭養成課程の学生 90 名（有効回答率 72%）を対象に、ChatGPT を活用した授業を行い、授業前後でアンケート調査と小テストを実施した。授業前後で、フィジカルアセスメントに関する資質能力は有意に高くなった ($p < 0.05$)。一方、ChatGPT を活用した群と活用しなかった群で、資質能力に違いは見られなかった。ChatGPT が学習の役に立ちそうだという認識は、授業前より授業後の方が有意に高くなった。自由記述では、新たな視点の獲得や思考プロセスの支援への有効性を実感する記述が多くみられた。ChatGPT の活用は、フィジカルアセスメントへの意欲向上や多面的な視点の獲得に有効であることが示唆された。

Keywords : フィジカルアセスメント、頭部外傷、模擬事例、ChatGPT、大学生、アンケート

第3の場を利用した若者にとってどのような意義があったのか

—あるユースセンターでの実践を事例として—

学生番号 22M23030 光岡 歩美

本研究では、第3の場を利用した若者たちが、その場をどのように意味づけているのかを明らかにしようとするものである。近年、こども家庭庁のリーダーシップの下、家庭や学校に次ぐこども・若者の居場所づくりが推進されている。その中で居場所の大切さが提唱されている。その一方で、当事者の主観に依拠する部分の大きい居場所を実際に利用した当事者たちに焦点を当てた論文は少ない。そこで、実際に第3の場の1つであるユースセンターをフィールドとし、利用した若者にインタビュー調査を行い、分析をする。具体的には、Yユースセンターに出入りしている若者4名を調査対象として、半構造化インタビュー調査を行い、かれらを取り巻く生活経験や学校生活と照らし合わせながら分析を行った。

本研究の成果として、かれらに共通する第3の場の意味は、「潜在的評価基準を超えたフラットな場」「自分の特性を活かす在り方を模索できた場」「成人しても頼れる場」であることが明らかになった。また、かれらにとって居場所は1つではないことからも「自立のための場の1つ」であることも示唆され、社会の中で多くの依存先を持つことは、自分自身がその時に必要とするサポートを選択する自由を得られることにもつながると考えられる。これらの成果は、地域における若者の成長支援の取り組みに示唆を与えるものであり、教育科学としても重要な意義を持つ。

Keywords : 第3の場、ユースセンター、居場所、若者支援、質的研究

知的障害特別支援学校における学生ボランティアとして 子どもと関わることについての実践と考察

—「受け止めつつ、伝える」ことに焦点を当てて—

学生番号22M23031 武田 晏奈

本研究は、近い将来に知的障害特別支援学校の教師になる者にとっての、学生ボランティア体験がもたらす新たな意味について明らかにすることを目的とした。鯨岡（1999, 2006, 2016）の示唆を受け、知的障害と呼ばれる子どもを間主観的に分かること、「相手の思いを受け止めつつ、自分の思いを伝える」という関わりを体験し、互いに成長できるような関係を築くことを目指した。これを基に、約7か月間に渡り、毎週1, 2回のペースで知的障害特別支援学校高等部の作業学習陶芸班の授業に参加し、学生ボランティアとして特に2名の生徒と関わった。そこで事例をエピソード記述に書き、分析した結果、実は、知的障害と呼ばれる生徒が「教師」、学生ボランティアの私が「生徒」という関係になっていたことが分かった。私は、知的障害と呼ばれる2名の「教師」（=私が教師になったときには生徒となる存在）から、まさに自分が理想とする「思いを受け止めつつ、伝える」という生の体験を与えられ、安心や存在感をもたらされた。ここでは、「逆転」（ヴィクター・W・ターナー, 2020）の体験が起こっており、これは、私が学生ボランティアというあいまいな存在だったからこそ起きたのだと考えた。したがって、特別支援学校の教師になる直前に学生ボランティアで「逆転」の体験をすることで、教師になってからもずっと、教師一生徒という身分が構造化された関係にありながらも、平等で真正の関係をもって子どもと関わることができるようになると結論付けた。本研究は、ボランティアというあいまいな立場から子どもと関係を築く様子を精緻化して描こうとする点において、教育科学の発展に寄与する。

Keywords : 知的障害特別支援学校、学生ボランティア、高等部の作業学習、関与観察、
エピソード記述

保育施設においてカリキュラム・マネジメントを実現するための 実用的な保育者の振り返り点検・改善資料の作成

学生番号22M23032 有田 翔

現在のわが国の保育施設においては、カリキュラム・マネジメントの側面の一つである、園の保育全体に関する国の基準を充足すると共に、保育の目標・ねらい・内容の連関性の確保された計画作成が困難な状況にあることが指摘されている。そこで、本研究では、その実現のための実用的な保育者の振り返り点検・改善資料の作成を目的とする。まず、我が国の幼稚園、保育所及び認定こども園の保育全体に関する管轄省庁公表資料の中の保育者の振り返りの仕方に関する記述を抽出し、その実用性について検討した。その結果、長期指導計画及び全体的な計画作成に関わる保育者の振り返りの仕方に関する記述が実用的でないことを明らかにした。さらに、我が国の保育施設にカリキュラム・マネジメントの導入された2018年以降に公表された保育者の長期の振り返りに関する先行研究を収集し、長期指導計画及び全体的な計画作成に関わる保育者の振り返りの仕方の到達点を整理した。その上で、以上の成果に基づき、保育施設でカリキュラム・マネジメントの前述の側面を実現可能にするために、保育の全体的な計画及び年間指導計画、月間指導計画、短期指導計画ごとに、保育の振り返りから計画作成に至るまでに保育者が行う必要のある事項の点検・改善資料の考案を行った。

Keywords : 保育者、振り返り、カリキュラム・マネジメント、点検・改善資料、指導計画

実践的思想形成を目指した社会問題学習の単元開発研究

—公民科での感染症差別問題の教材化を通して—

学生番号22M23033 松原 心

本研究の目的は、実践的思想形成を目指した社会問題学習の授業構成原理を具体的な単元を開発・実践することを通して、明らかにしようとするものである。

2018年に告示された新学習指導要領では高等学校公民科に新科目「公共」が必修科目として設立され、2022年度からスタートすることになった。「公共」は、現代社会に存在する課題を主題として、それに関連した内容を学ぶ構成になっており、社会問題学習の充実が求められている。社会問題は問題である以上、その問題によって苦しんだり、生きづらさを感じたりするなど感情的な側面も強く関わっており、社会問題学習については、社会認識体制と感情の結びつきが強い学習である。しかし、これまで、社会問題学習は主に社会認識体制に焦点を当てた研究が多くなされてきた。そのため、社会認識体制だけでなく感情との関わりという視点からの研究、つまり実践的思想形成に関する研究がなされるべきである。

本研究の成果としては、以下の2点が挙げられる。第一に、授業構成原理を示す形で社会認識体制と感情が関わる実践的思想形成を目指した社会問題学習の在り方を提示した点、第二に、実践的思想形成における社会認識体制と感情の関わりやその結びつきの一例を示した点である。

高等学校公民科、特に「公共」は、社会問題学習の充実が求められている教科・科目であるが、その方法については明確に示されていない。本研究は社会問題学習の在り方の一例を示し、今後の市民的資質育成研究、そして社会問題学習に関する研究や実践に寄与できる。

Keywords : 社会科教育、市民的資質、実践的思想形成、公共、社会問題学習

中国における書院の歴史と現代的展開

学生番号22M23034 艾 怡然

書院は中国の歴史上、主に民間で発展した教育機関である。8世紀に官立機関として登場し、11世紀以降は民間に広く普及した。清朝末期以降、近代学校教育制度の確立により衰退した。

本研究は、書院を対象に、歴史的な発展と現代の復興動向を明らかにした。第一章では、歴史上の書院の特徴を検討し、教育、祭祀、蔵書刻書の三機能を持つ機関であり、主に民間で発達したことを示した。自由な学習雰囲気と人格・学問の調和的指導が重視されていた。第二章では、現代の書院の「復興」の動向を考察した。現代の書院は柔軟なカリキュラムを持ち、子供から高齢者までが学び、終身教育の場と機会を提供している。国学と儒教教育も重視している。第三章では河北省の書院を分析し、教育面では研修・講習活動が中心であるが、祭祀や刻書機能はほとんど見られないことを示した。書院建設の形態は、歴史型、社区型、観光地型、学校型など多様である。

歴史上の書院が有する教師と学生の人格的関係、自由な議論や学問的雰囲気、点数競争よりも好奇心を重視する人間教育などの特徴は、現代の中で見失われつつある部分である。そして、現代の書院が有する修身教育や個性化教育の方向性は、学校教育や応試教育の過度な進行を捉え直し、人間形成のありかたを考える示唆を与えるという成果を得た。今後の課題として、より広く事例とデータを収集し、書院の実態と社会的文化的意味を探りたい。

Keywords : 書院、儒教、終身教育、師弟関係、復興

力覚デバイスを利用した質量・重力を 体験的に学習する教材の開発

学生番号22M23035 柴田 未央

学校教育において体験的に学習することは問題解決能力を育むのに重要である。日本の多くの授業では、教室で実験・観察などを通じて体験的に学習するものよりも実験を行う意味、結果のまとめ方、考察の方法、結論の導出にかかわる知識を受動的に学習する方法が優先的になってしまることがある。中学校での重力の範囲で実験は行われておらず、教科書や問題集を活用して理解を深める方法による学習のみになってしまふことも少なくない。しかし、現在の学校教育の設備では授業に体験的な学習を取り入れることが困難な内容であっても、ICTやVR教材を用いることができれば体験的に学習することができる。現在の生徒たちは生まれた時からICTが身の回りにある環境で育っており、GIGAスクール構想によってさらに授業内外でデジタル技術の活用は彼らにとって身近なものになった。そこで本研究の目的は、Unityで作成した仮想空間内のオブジェクトを表示し、力覚デバイスで触る、つかむ、投げることで接触の感覚から異なる惑星間の重力下で質量と重さの違い比較し体験的に学習する教材を開発することである。

新しい教育のかたちを切りひらいていくことこそが教育科学だと思うので、今回の研究で開発した教材で生徒の成長の一端を担うことができたら幸いである。

Keywords : 力覚デバイス, Unity, VR, ICT, 接触

ゲーミフィケーションを適用した STEM 教材の開発と改善ならびに 小学生高学年に対する STEAM 教育の実践

学生番号22M23037 ZHANG XINYI

本研究は、Society 5.0時代における小学校STEAM教育の充実を目指し、児童のSTEM教科と英語への興味・関心を高めるため、micro:bitを活用したバランスゲーム教材の開発・改善とその教育効果を実践授業により調べる。教材の開発においては、バランスボード設置方法の簡略化やモーター制御の安定化などの技術的改善を行った。また、教材使用時には、ゲーミフィケーション要素を取り入れることで、学習意欲の向上を図った。実践授業では、小学5年生18名を対象に、総合的な学習の時間にバランスゲーム教材を活用した授業を行った。授業の中ではプログラミングと英語学習を統合した協働的な学習活動も取り入れ、児童の主体的な参加と創造的な問題解決を促した。また、チームワークが試されるものづくりや英語コミュニケーション環境を取り入れ、学びの楽しさを体験させながら、協働を行わせた。

実践授業の結果、児童のプログラミングと英語使用に対する積極性が向上し、グループ活動を通じた問題解決能力の発展が確認された。また、教科横断的な学習により、創造的思考力や実践的スキルの育成にも効果が見られた。一方で、プログラミングの習熟度や英語利用に個人差が見られるなどの課題も明らかになった。

これらの知見は、小学校におけるSTEAM教育の実践的展開に向けて、教材開発および指導方法の改善に有益な示唆を提供すると考えられる。

Keywords : STEAM教育, プログラミング教育, 英語教育, micro:bit, バランスゲーム

中学校家庭科における高齢期学習に関する研究

—生涯を見通す視点—

学生番号22M23038 高田 水穂子

本研究の目的は、中学校家庭科の高齢期学習において生涯を見通す視点で学ぶことによって、高齢期を中学生が自らのライフコースの一つとして考えることができるか実践を通して明らかにすることである。本研究では、現在日本において高齢者の割合が増加し、高齢期が長くなっていることや、中学校家庭科の学習においても高齢者との関わり方についての理解が重視されていることを踏まえ、指導の流れを考案し、岡山県内T中学校の協力を得て、授業実践を行った。ここでは、①長期化した高齢期をわかりやすく理解させること、②多様な高齢者を考えられるよう地域のアクティブシニアの活動動画を用いること、③ライフコースの中の一つのライフステージとしての高齢期を視覚的に示す資料を活用することなどをポイントとして授業を構成し、中学生が将来のライフコースを考える際、自分のライフコースに高齢期を含めて考えられるようにした。授業実践の結果、9割の生徒は、高齢期学習が深まったと考え、自分のライフコースに高齢期を含めて考えることができ、ライフコースの中で高齢期を考えることで高齢者や高齢期について理解が深まることが明らかになった。平成29年告示の『中学校学習指導要領解説技術・家庭編』では、中学生と高齢者が地域との関わりの中で協働する必要性が示されている。今回の授業実践は、地域のアクティブシニアの活動動画を用いて高齢者と接し、地域の高齢者を知るきっかけとなった。したがって、中学生段階の地域交流の基盤となる学びだと考えると本研究は、教育科学的にも重要な意味をもつと考える。本研究は教育学研究科「研究倫理委員会」の承認を得て実施した。

Keywords : 中学校家庭科、授業実践、高齢期学習、ライフコース、アクティブシニア

学びの構成原理に基づく自動発話分析手法の開発

学生番号22M23039 CHEN WENJUN

近年、日本の初等中等教育において主体的・対話的で深い学びが求められる背景を踏まえ、教師だけで学習者の対話を分析・評価できる発話可視化分析ツールが開発された。しかし、多忙な教師にとってこの発話分析でも負担は大きく、容易には行えないのが現状である。そこで本研究では、発話分析可視化ツールの基盤となっている学びの構成原理に基づき、学習者の対話をルールベースAIと生成AIを組み合わせた自動発話分析手法を開発することを目的とする。まず、単純な発想による自動発話分析手法を開発し実際の対話へ適用した結果、専門家による手動分析と完全に一致した割合が18%、曖昧な判断も含めると58%という結果が得られ、一定の精度での自動分析が可能となることが示された一方でいくつかの課題も見つかった。これらの課題に対し、自動発話分析手法を2段階で改善させた結果、最終的に曖昧な判断を含めた一致率を70%まで向上させることができた。本研究は、AI技術を活用した授業評価の効率化を通じて教師を支援し、教育科学による教育現場における学習評価の新たな可能性を示すことができたと考えている。

Keywords : 知識構成型ジグソー法、授業評価、発話分析、ルールベースAI、生成AI

エールメッセ広告における単純接触効果

学生番号22M23040 仲村渠 ひなた

本研究は、エールメッセ広告という社会教育的コンテンツを用いて、接触頻度が好意度にどのような影響を与えるか検討を行った。大学1年生を対象に行われたe-learningの学習終了画面にエールメッセ広告の画像を表示することでデータを収集し、学生に表示された数を接触回数とし、クリック数を好意度と仮定した。これにより、絵や文字刺激同様に広告においても、接触頻度の上昇により好意度が上昇する単純接触効果が現れるのかについて検討した。分析において、本研究データは学生に測定時点がネストする階層構造を持っていたため、測定時点 (Level-1) と学生 (Level-2) による2レベルのマルチレベルモデルを適応した。

研究1ではエールメッセ広告による研究が行われていない段階であったため、実験的な介入を行わず、接触回数とクリック数の関係を検討することを目的とした。結果として、個人間において単純接触効果が現れたことがわかった。しかし、扱ったエールメッセ広告を1つに限定して行われた研究であったため、他のエールメッセ広告でも同様であるか不明な点で限界がある研究となつた。そこで研究2では、研究1とは違うエールメッセ広告を扱って再現性を確かめることに加え、広告間での影響を検討することを目的とした。その結果、個人内において単純接触効果が現れることがわかった。また、広告間による影響もわずかに現れていることが読み取れた。これにより、エールメッセ広告においても単純接触効果が現れることがわかった。

Keywords : 広告、単純接触効果、マルチレベルモデル、ビッグデータ、縦断分析

形容動詞語幹の後接要素についての研究

—「密」の品詞性を追究して—

学生番号22M23041 LIANG YUTONG

本研究では、話し言葉における形容動詞の後接要素の実態を捉え、形容動詞の品詞性を検討すること、コロナ禍における「密」の変化を追究し、社会的状況による言語変化を考察することを目的としている。本研究の主な結論は以下の3つである。①形容動詞の後接要素は多様性、集中性、独立性を持っている。伝統的な後接要素（「助動詞-に」「助動詞-だ」「助動詞-な」），近年注目されている格助詞「の」以外にも、他の格助詞や副助詞が後接することも見られる。たしかに、形容動詞の後接要素は多様であるが、実際には「助動詞-に」「助動詞-だ」「助動詞-な」に集中している。また、後接要素のバリエーション数と総使用頻度、形態詞率の関連性が強いとは言えず、後接要素は独立性が保持されている。②コロナ禍から「密」の名詞性が高められた。BCCWJのデータと比べると、ツイッターのデータでは、「密」という語が格助詞を伴って使用される頻度が増えた。また、ツイッターのデータでは、「密回避する」「密防止する」という用法が現れた。③他の形容動詞においても、あるきっかけで名詞性が高まる可能性が高い。「密」は元来、典型的な形容動詞と見なされていたが、近年では名詞的な用法や形容詞的な用法が徐々に増えていることが確認された。このことから、他の形容動詞においても、特定の契機を通じて品詞の境界を越え、他の名詞的な性質が高まる可能性が高いと考えられる。また、名詞性の高まりがさらに他の品詞への変化を促すことにも繋がるだろう。本研究は、形容動詞の理解を促し、国語教育や日本語教育における形容動詞の扱いを見直す契機を提供するものである。

Keywords : 国語教育、日本語教育、「密」の品詞性、形容動詞、形容動詞の後接要素

日本の高等学校へのイエナプラン導入の可能性

—日蘭の「教育実践」と「教育制度」に着目して—

学生番号22M23042 横溝 俊

本研究の目的は、日本の高等学校へのイエナプラン導入の可能性を検討することである。現在、日本の高等学校における教科学習は、いまだに知識重視の一斉授業が中心であり、生徒の求める能動的な学習形式との間に乖離が生じている状況である。この状況に対して、「学校共同体」の理念を基に「自律」と「共生」を目指して、ペーターゼンが実施したイエナプランの導入を検討する。イエナプランは、発祥国のドイツをしのぎ、オランダで広く普及している状況にある。本研究では、まず日本におけるイエナプランの実施状況について整理・分析を行った。次に、オランダにおいてどのようにイエナプランが受容されたのかを探るべく、オランダの教育関係者へのインタビューを実施し、オランダ教育の実践状況を把握した。その分析結果から、オランダ人教師の指導に関する共通点を見出した。オランダ教育の実践面での特徴は、コーチングマインドを持った指導にあることが明らかとなった。このオランダ人教師が持つコーチングマインドは、オランダ教育が重視する社会性の育成という観点、教員養成・教員研修によって醸成されているということが導き出された。これらの実践面における教師の教育マインドと、オランダ憲法第23条「教育の自由」という制度が相まって、オランダではイエナプランが受容されたのである。このことから、日本の高等学校におけるイエナプランの導入には、日本の学校制度上の条件よりも、教育実践における教師の指導観の転換が必要であるという結論に至った。本研究における成果は、教育科学という観点からも、制度と実践を結び付ける重要な意味を有するものであると考える。

Keywords : イエナプラン, オランダの教育, 高等学校, 教育実践, 教育制度

男性保育者自身が捉える

保育職継続の意思決定に関わる自己認識過程

学生番号22M23044 栗原 匡虎

現在、我が国では、男性が保育職に従事することが認められ、男性の育児参加にも注目が高まっているが、依然として稀有な存在である。本研究では、男性保育者自身に焦点を当て、保育職継続の意思決定に関わる自己認識の変容過程を明確化し、保育職継続に有用な推進策を検討することを目的とした。

先ず、第1章で男性保育者に関する先行研究を概観し、本研究の位置付けを明確にした。次に、第2章で保育現場における男性保育者の現状や課題を改めて確認した。その結果、男性保育者を取り巻く周囲の者は、男性保育者に特性を活かした保育を求める一方、男性保育者自身は保育の専門性を志向しており、求められている役割とのズレが生じていることが課題として浮き彫りとなった。第3章では、熟練男性保育者、初任保育者を対象に、保育職継続における自己認識を尋ねるインタビュー調査を行い、そのデータをTEM図に起こし、質的に分析した。その結果、職場環境や男性性に関する課題が保育職継続の障壁となり得るが、「“男性保育者”としての自己認識」から「“一人の保育者”としての自己認識」への変容、及び長期的な保育職への従事で蓄積された保育経験や責任感、結婚や子どもの誕生といったライフイベント等、多様な要因が保育職継続を支える要因であることが明らかになった。

最後に、第4章では、周囲から見た男性保育者に対する認識と男性保育者の保育職継続の意思決定に関わる自己認識を比較し、男性保育者の保育職継続の推進策を検討した。その結果、男性保育者及び、周囲の者に対して、性別に囚われず“個人”として捉える認識の促進が重要であることが示唆された。

Keywords : 男性保育者, 自己認識過程, TEM (複線径路・等至性モデル), 保育者, ジェンダー

非母語話者日本語教師の教育観に関する調査研究

—異文化理解に対する見方に焦点を当てて—

学生番号22M23045 LI YISHUI

本研究は、非母語話者日本語教師の教育観に焦点を当て、特に異文化理解に対する見方を探求することを目的としている。調査対象は、中国で日本語教育に従事する経験豊富な非母語話者教師4名で、インタビューを通じて彼らの教育実践や学習者育成の意識を明らかにし、異文化理解を促進する方法についての知見を得ることを目指している。

グローバル化が進む中で、日本語教育は単なる言語知識の習得から、実践的な言語運用能力や異文化理解の育成へと変化している。特に、中国などのアジア地域では、日本語学習者数が急増しており、教育の質向上が求められている。このため、非母語話者教師の役割も変わり、異文化理解に向けた指導意識と能力が重視されている。先行研究では、非母語話者日本語教師の役割や資質・能力について多くの議論があり、特に彼らが持つ学習者視点や異文化理解の促進という強みが強調されている。また、異文化理解は単なる知識の獲得ではなく、文化的差異への認知構造の変化を伴うものであることが示されている。

本研究では、「教育観」を「教師が教育をどのように捉え、どのような教育実践を行い、子どもたちにどのような力を育成したいと考えるか」という価値観や信念」と定義している。これに基づき、4人の非母語話者日本語教師のインタビューデータをふまえ、「文化の捉え方」、「教育実践」、「学生観」と「非母語教師観」から、異文化理解に対する見方を考察し、日本語教育における異文化理解に関する具体的な実践知を蓄積し、非母語話者教師の専門性向上や日本語教師養成プログラムへの新たな視点を提供することが期待されている。また、異文化理解の質的向上につながる知見を得ることで、より包括的で効果的な日本語教育が実現されることが目指されている。

Keywords : 教師教育、日本語教育、質的調査、教育観、異文化理解